

第一章 本稿の目的と考察の方法

第一節 本稿の目的

相対主義をめぐる状況は、非常に混乱している。相対主義という言葉は、賞賛のために使われることがある。たとえば、〈この国際化の時代に、自分の考えだけにとらわれていてはいけない。相対主義的な視点が必要である〉と言われるような場合がそうである。しかし、ある考えは、相対主義だといって批判される。たとえば、〈相対主義者は、アナーキストだ〉と言われるような場合がそうである。また、他の人から相対主義者だと見なされるにもかかわらず、自分が相対主義者であるということを認めない人もいる。そのような状況のなかで、哲学において、さまざまな考えが、肯定的であれ、否定的であれ、相対主義と呼ばれ、一方で、相対主義に対する批判も多くなされている。この混乱した状況を整理することが必要である。しかし、これまで、相対主義をめぐる混乱を、全体的に整理するという試みはなされてこなかった。本稿では、相対主義をめぐる状況を整理し、その考察を受けて、相対主義としてどのようなものが考えられるのかを示すことを目指している。⁽¹⁾

その際、考察の対象としては、複数の〈相対主義的に見える考え方〉と複数の〈相対主義批判〉を取り上げる。その選び方は、ある程度恣意的である。しかし、それは、でたらめに選ばれたものではない。選ばれた〈相対主義的に見える考え方〉はどれも、現代の相対主義的な考えに大きな影響を与えている。また、選ばれた〈相対主義批判〉は、ここで扱う〈相対主義的に見える考え方〉を踏まえている。もちろん、これらの考えで、現代の相対主義をめぐる重要な考えを網羅しているわけではない。しかし、ここでは、相対主義をめぐる状況を整理し、何らかの一般的なことを述べることを目的としているので、考察の対象として、複数の主要な考えがあれば十分である。

また、研究方法としては、実験的に、相対主義をめぐるさまざまな議論のなかで論争点となってきた点を指標とし、それぞれの点に関して、それぞれの考えがどのような見解を持っているかを整理するという方法をとる。そして、その過程を経て、〈相対主義批判〉が〈相対主義的に見える考え方〉に対して正当に向けられたものかどうかを検討する。

そして、最後に、以上のような考察を手がかりにして、相対主義としてどのようなものが考えられるかを指摘する。

けれども、具体的な考察に入る前に、考察の対象として取り上げる考えと、さしあたり取り上げる整理の指標についての、若干の説明が必要である。

第二節 考察の対象

まず、考察の対象として取り上げる考えについての説明から始めよう。

〈相対主義的に見える考え方〉と言っても、さまざまなものがある。そして、それらすべてのものを一度に扱っては、議論の焦点が絞りにくくなる。それゆえ、ここでは、考察の対象を限定しなければならない。

相対主義を話題にするときまず考えられるのは、相対主義が個人に関するものか、それとも、集団に関するものかという点である。何かが個人によって異なるなら、それは、個人に関する相対主義であると言われる。また、何かが集団によって異なるなら、それは、集団に関する相対主義であると言われる。そして、もちろん、個人に関するものは、プロタゴラス以来の伝統を持つものであり、考察すべきものである。しかし、現代において特に論争されているのは、集団に関するものである。⁽¹⁾ それゆえ、ここでは、個人に関するものに言及することによって問題がよりわかりやすくなる場合を除いては、集団に関するものに話を限定する。

けれども、その際、どのような視点で集団を選び出すかが問題である。なぜなら、同じ所に住んでいる人々、同じ時代に生きていた人々など、さまざまな視点で集団を選び出すことができるからである。しかし、ここでは、同じ概念図式 (conceptual scheme) を共有するものということで、集団を考えることにする。これらの場合、たとえ場所や時代によって集団を選び出した場合と集団の外延が共通であるとしても、概念図式の共有という視点で集団が選び出されたことになる。ただし、概念図式をどのようなものと考えるかについては、第三節で述べる。

もちろん、〈概念図式が共有されていることをどのようにして理解するのか〉という問題や〈概念図式の共有などそもそもありうるのか〉という問題もある。しかし、ここでは、それらの問題は考えないことにする。つまり、概念図式は共有でき、概念図式の共有を理解することもできるという前提のもとで、話を進めていく。ただし、そのことは、あくまで、相対主義をめぐる問題に限定を加えて考察するという目的のためのものであり、概念図式の共有やその理解に関する問題が、考察する必要のない問題であるということを示すものではない。

以上のように、ここでは、同じ概念図式を共有する集団に関するものとして、それゆえ、結局は、概念図式に関するものとして、問題を考察していこうとするのだが、ここでの考察の対象の限定は、それに尽きるものではない。なぜなら、今までに言われてきたのは、〈何か (A) が何か (B) に相対的である〉、もしくは、〈何か (A) は何か (B) によって異なる〉ということの B の部分が個人ではなく同じ概念図式を共有する集団であるということだけだからである。つまり、A として何を考えるかは言われていない。次に A について考察してみよう。

A として考えられるものは、真理であったり、存在であったり、意味であったり、価値であったりする。つまり、それぞれ、〈何が真であるかは概念図式に相対的である〉・〈何が真であるかは概念図式によって異なる〉、〈何が存在するかは概念図式に相対的である〉・〈何が存在するかは概念図式によって異なる〉、〈言葉が何を意味するかは概念図式に相対的である〉・〈言葉が何を意味するかは概念図式によって異なる〉、〈何がよいかは概念

図式に相対的である〉・〈何がよいかは概念図式によって異なる〉のように考えられる。そして、真理に関するものは、認識的相対主義と言われる。また、価値に関するものは、道徳的相対主義、もしくは、倫理的相対主義と言われる。もちろん、Aとして価値を考える立場も重要である。しかし、ここでは、Aとして真理を考える認識的相対主義に焦点を当てることにする。なぜなら、集団によって、倫理的価値のみならず、真理や存在まで異なるという考えは、われわれに衝撃を与えるものなのであり、それゆえ、第一に考察されるべきものだからである。

ただし、認識的相対主義に焦点を当てるということは、存在や意味や価値に関する問題を考えないということではない。必要に従い、それらの点にも触れる。ここで重要なのは、真理すらも集団によって異なるということである。そして、認識的相対主義というのは、基本的には知識に関する問題なので、それには、存在や意味や価値に関する問題も密接に関係してくる。

以上のように見てくるならば、本稿で扱おうとする考えが明らかになる。つまり、概念図式を共有する人々の間では問題が生じないと前提したうえで、異なる概念図式間の問題を扱う。そして、それは、一般に、概念図式の相対主義、概念相対主義 (conceptual relativism) と呼ばれる。ただし、本稿では、以下において、混乱が生じないと考えられる場所では、相対主義で概念相対主義のことを表すことにする。

本稿では、そのように限定を与えたうえで、〈相対主義的に見える考え方〉や〈相対主義批判〉の内容を整理することになる。

まず、〈相対主義的に見える考え方〉として、クワイン (Quine, W. V. O.)、クーン (Kuhn, Thomas S.)、グッドマン (Goodman, Nelson.) の考え方を取り上げる。しかし、そのことは、彼ら自身が自分のことを自分が考えた意味での相対主義者であると思っているかどうかとは、別の問題である。ここでは、彼らの考えが、相対主義と見なされうるということが、重要である。

次に、相対主義を批判する考え、相対主義に制限を加えようという考えとして、デイヴィッドソン (Davidson, Donald.)、パトナム (Putnam, Hilary.)、バーナード・ウィリアムズ (Williams, Bernard.) の考えを取り上げる。ここでの目的は、彼らが相対主義として批判している考えがどのようなものかを明らかにすることである。

第三節 考察の方法

ここでは、整理の指標についての説明を行う。

考察の対象とする考えを整理するためには、何らかの指標が必要である。そして、相対主義の定義はその候補である。しかし、この場合、相対主義の定義は役に立たない。相対主義をめぐる状況が混乱しているという認識のもとで、それを何らかの指標により整理しようというのがここでの目的である。ここでは、以下の複数の指標を考えたい。そして、その際、指標として取り上げるのは、概念相対主義をめぐるさまざまな議論のなかで、相対主義と相対主義批判との対立点と見なされてきた論点である。

そのような指標として、以下の三つのものを考える。

(1) 《複数の概念図式の可能性》

そのような指標としてまず考えられるのは、《複数の概念図式の可能性》である。概念図式とは、辞典的には、「認識論において、われわれの知覚や思考を分節化し組織化する概念のネットワークのこと。その枠組みを通じてわれわれは経験を解釈し、記述し、説明することが可能となる」⁽¹⁾のものであり、「それによってわれわれの思考や知覚を組織化する概念の一般的体系」⁽²⁾のことであり、デイヴィドソンによれば、「経験を組織化する方法であり、感覚のデータに形式を与えるカテゴリーの体系であり、個人や文化、時代が通り過ぎる光景を眺める視点である」⁽³⁾。したがって、概念図式が複数あるということは、経験を組織化し、われわれのものの考え方（真理・存在・価値等についての考え方）を規定するものが複数あるということである。概念図式が複数存在するという事は、概念相対主義の前提であるので、複数の概念図式という考えが意義を持たないものだと指摘することは、相対主義批判の一つの論点となりうる。

(2) 《概念図式間の相互理解可能性》

次に考えられる指標は、《概念図式間の相互理解可能性》である。この《概念図式間の相互理解可能性》を認めるか認めないかということも、相対主義をめぐる論争のなかで重要視されてきた点である。たとえば、概念図式の相互理解不可能性を根拠に、概念図式間の選択に関して決定的なことは言えないという立場が、概念相対主義として批判されることがある。この相互理解可能性という考えは、上記の〈相対主義的に見える考え方〉や〈相対主義批判〉のなかで、さまざまな形で現れる。それは、翻訳可能性と結びついて現れることもある。その場合は、相互理解不可能性は、相互翻訳不可能性を表す。また、相互理解可能性が、翻訳可能性とは直接に結びつかないで現れることもある。この場合は、確定的な翻訳ができないということは、相互理解不可能性を示すものではない。《概念図式間の相互理解可能性》を指標として考えるということは、それぞれの考えにおいて、概念図式間の相互理解可能性を認めるかどうか、認めるとしたらどのような意味で認めるのかということ考察することになる。

（3）《概念図式の評価基準》

最後に考えられる指標は、《概念図式の評価基準》である。複数の概念図式が存在すると考える場合、それらの概念図式の選択に関する問題が生じる。このような問題は、概念図式に関するメタな問題である。また、それは、概念図式を正しいとか間違っていると評価することに何らかの根拠があるかという問題にもなる。そして、この問題にどう答えるかも、相対主義をめぐる議論のなかで論点となっている。たとえば、概念図式の選択のためには何の基準もないという立場は、相対主義であるとして批判される。〈相対主義的に見える考え方〉や〈相対主義批判〉に関して考察する際に、《概念図式の評価基準》ということ指標にとり、それぞれの考えが、概念図式の評価に関して基準を認めるかどうか、認めるとしたらどのような意味で認めるのかを考察することが必要である。

以上のように、三つのもの、《複数の概念図式の可能性》、《概念図式間の相互理解可能性》、《概念図式の評価基準》を指標として考える。

考察の対象と考察の際のさしあたりの指標に関する説明は、これで、十分である。次の問題は、対象として取り上げたそれぞれの考えを、ここで挙げた三つの指標を使って整理することである。次章では、〈相対主義的に見える考え方〉についての具体的な考察に入りたい。